蚕から着物ができるまで

4-3
伊藤ゆいな

目次

はじめに

第一章　カイコと繭
1　繭をつくる虫
2　現在使われている繭
3　カイコの一生
4　カイコの体のしくみ
5　繭糸のひみつ
6　繭から生糸をつくる
7　天然せんいと化学せんいのちがい

第二章　染めのいろいろ
1　染めと織り
2　友禅とは
3　型染めとは
4　ろうけつ染めとは
5　絞り染めとは
6　紬とは
7　絣とは
8　日本の美しい色

第三章　日本の文様

梅・松・竹・桜・菊・楓・魚・鸞
蝶・獅子・霞・波・車・扇・家屋
矢・のし・七宝・亀甲・菱・麻の葉
石畳・縞・格子・点

第四章　日本の装束の歴史

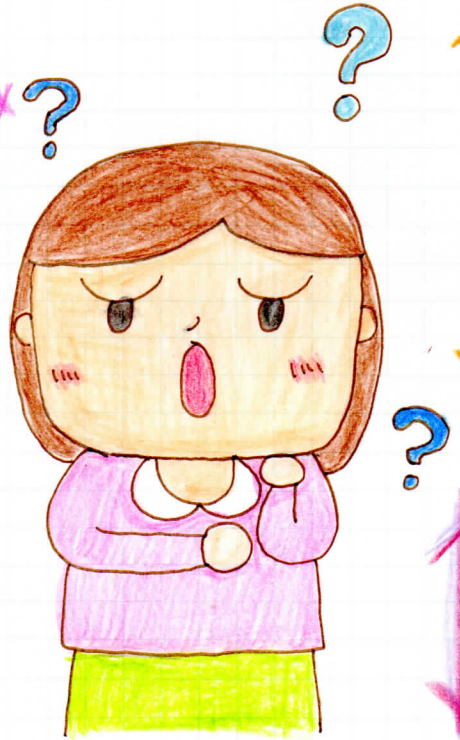
上古・飛鳥・奈良・平安・鎌倉・
室町・江戸・明治・大正

第五章　着物のうつりかわり

おわりに

はじめに

私は、３年生の総合の授業で八王子市が“養蚕の町”という事を知り、実際にカイコを育て、幼虫から繭になる様子を観察しました。カイコについていろいろなことをぎ問に思ったのでカイコからつくられる絹糸や、絹糸から作られる着物について興味を持ち、調べてみようと思いました。



カイコの種類ってどれぐらいあるの？

カイコはどうやって成長するのかな？

着物のもようはどんな意味があるの？

有名な着物ってどんなもようなのかな？

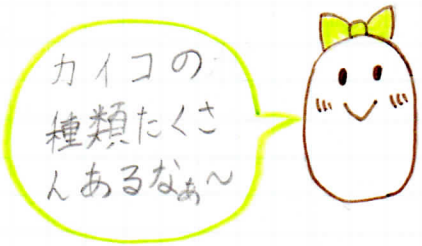
なんでシルクはすべすべしてるの？

昔の人はどんな絹の服を着てたのかな？

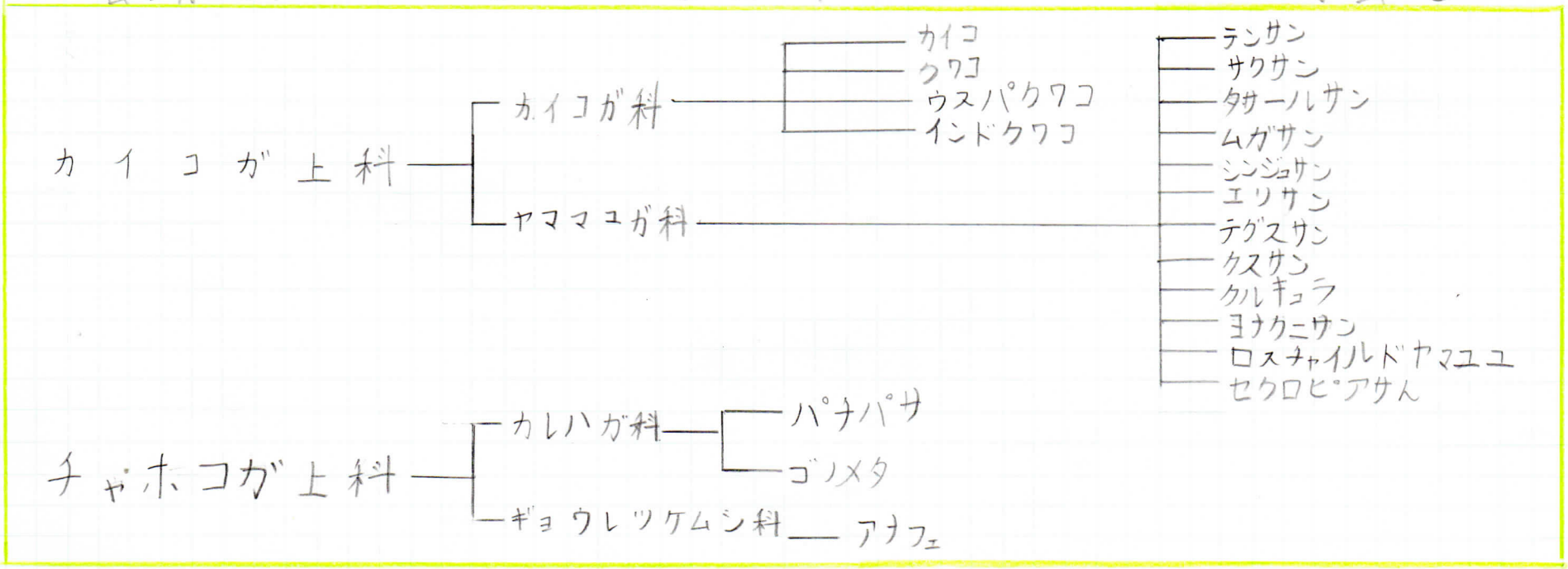
まゆこ
繭子ちゃん

第一章　カイコと繭

1. 繭をつくる虫



カイコは、チョウやガと同じ仲間の昆虫です。カイコの仲間は世界各地にいますが、カイコのように人間により改良され飼育されているものを家蚕、野生のものを野蚕といいます。



世界の野山には、みの虫のように袋状の巣を作っているものが沢山います。それぞれ上手に住み分ける為に虫によって食べる葉が違います。また繭の形や大きさ、色なども様々です。これを総称して野蚕と言います。

2 現在使われている繭

	産地	食性	繭の色	糸の色	利用	繭の絵
天蚕	日本各地	広葉樹の葉	グリーン	グリーンきなり	ショール等などに利用	
柞蚕	中国北東部	広葉樹の葉	うす茶	うす茶	洋装材として多用。	
タサール蚕	インド北東部	楕円広葉樹の葉	茶～グレイ	うす茶	インドシルクとして親しまれている。	
ムガ蚕	インドアッサム地方	ホオノキ木蓮	淡茶	ゴールドうす茶	ショール洋服和服	
クリキュラ	インドネシアフィリピンインド等		黄金	うす黄	ショール洋服小物等	

かえったばかりの
のかいこはもが
生えて真っ黒な
のでもこという。

3.カイコの一生

カイコは、カイコガの幼虫の呼び方です。カイコガはチョウ・ガの仲間です。カイコは、チョウと同じように約1ケ月半の短い一生の間に、卵→幼虫→サナギ→成虫と、すがたも変えます。これを完全変態といいます。また、幼虫はそのままでは大きくなれないので、4回大きな皮に脱ぎ変え成長します。

シルク博物館てん示

4.カイコの体のしくみ

足について

胸に6本、腹に8本、お尻に2本あります。サナギになると胸の6本だけになります。

呼吸

からだの脇にある気門から空気を取込み、からだ中にはりめぐらされた気管を通して、体内にたまったガスを体外に出します。

口がニつ？

カイコには、えさを食べる口と糸をはく吐糸口のふたつがあります。

眼状紋

ここが顔に見えるので、頭だと思っている人が多いのですが、ただの模様です。蚕は眼状紋を使って身を守るそうです。

骨がない？

カイコなどの節足動物には背骨がありません。そのかわりに、からだの外側をカラでおおっています。人は時間をかけて成長しますが、節足動物は、小さくなったカラをぬぎ、脱皮するため早く成長できます。

5、繭糸のひみつ

セリシン

のりのような成分きで、繭をつくるときに接着剤のはたらきをします。

フィブロイン

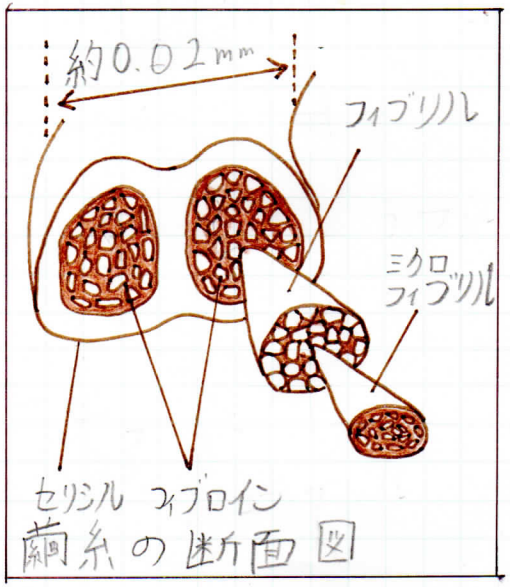
フィブロインの断面はでこぼこした三角形のような形をしています。

シルクはすべすべ

「ミクロフィブリル」というつるつるしたり繊維が何本も重なり合ってできているため、シルクはすべすべで肌ざわりがよく、いろいろな衣料品の素材に使われているのです。

シルクは美しい

外からの光が「フィブロイン」のでこぼこした三角形を通り、さまざまな方向に反射するため、シルクは美しく輝いて見えるのです。



繭糸の断面図

6.繭から生糸をつくる

繭を乾燥させ糸を引き出し、数個の繭からほぐした糸をあわせて生糸をつくります。主な工程に「乾燥」⇒「選繭」⇒「煮繭」⇒「繰糸」⇒「揚返し」があります。

乾燥・貯繭

製糸工場では、農家から運び込まれた繭を蛹(さなぎ)の成長やカビを防ぐために、大急ぎで蒸気の熱で乾燥させます。乾燥した繭は、少なくとも1ヶ月以上は温度・湿度が管理された繭倉庫に貯蔵されていました。

選繭

繭の品種や状態によって、シルクの光沢や質感が決まります。製糸にむかない虫食いの繭や汚れた繭などは取り除き、選別していました。

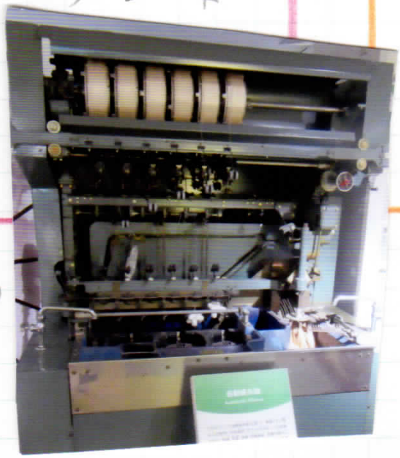
糸の原料にならない繭は再利用されます。糸を引いた後の蛹は鯉のエサになり、加工した時に出たクズはつりエサになります。

煮繭

水に溶けやすい性質をもつセリシンを煮ることで、接着をほぐしやすくします。全てやすくしたセリシンが完全にお湯に溶けだしてしまわないよう慎重に温度管理を行いながら繭を煮ます。

繰糸

煮ることでほぐれやすくなった繭の表面を、みご箒で撫で、糸口を深し出します。そして、いくつかの繭の糸口を何本かよりながらまとめていき、目的の太さ・長さの1本の糸にします。



昭和30年頃の自動繰糸機

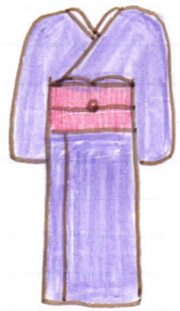
揚返し

繰糸で巻き取られた生糸は130%ほど無理に引き伸ばされて乾燥しているため、そのままの状態にしておくと、弾力性に乏しく切れやすい糸になってしまいます。生糸を本来の状態に戻し、強さ、光沢、柔軟性、風合いなどを整える作業が、「揚返し」です。

シルク製品へ

ネクタイ1本
繭140粒

スカーフ1枚
繭110粒



着物一式
(着物、帯、長襦袢など)
繭9000粒

ブラウス1枚
繭415粒

7.天然せんいと化学せんいのちがい

		せんい名	メリット	デメリット
天然せんい	植物せんい 綿と麻が一般的に知られています。	綿	吸湿性があり、丈夫。熱い強い。	シワになりやすく、収縮しやすい。
		麻	通気性がよく、清涼感がある。	シワになりやすく、摩擦で毛羽立つ。
	動物せんい 綿、羊毛、そして獣もせんいがあります。	シルク	光沢があり、しなやか。	日光で黄変、劣化する。虫害にあいやすい。
		ウール	保温効果が高く、弾力性がある。	縮みやすく虫害にあいやすい。
化学せんい	再生せんい	レーヨン	光沢があり、着心地がよい。	水に弱く、シワができやすい。
		キュプラ	吸湿性がよく縮みにくい	摩擦により毛羽立つ。
	合成せんい	ポリエステル	シワになりにくく、非常に強い素材。	吸湿性が低く、染色しずらい
		ナイロン	シワになりにく、弾性が強い。	日光で変色しやすい。

第二章　染めのいろいろ

1. 染めと織り

着物には染めと織りがあります。

染め

織りあがった生地を、染料につけたり、直接模様を描いたりして、色や柄をつける方法。代表的な染め方に、手描き、型染め、絞りなどがあります。

織り

色をつけた糸を織ることで、模様をつくりだします。糸のつむぎ方、染め方、織り方により、模様や生地の雰囲気が変わります。

2.友禅とは

友禅

江戸時代に宮崎友禅が始めた染め方。特殊なのりを開発したことで、生地に直接、絵を描くように模様を染められるようになり、着物は一気にはなやかになりました。京友禅、加賀友禅、江戸友禅が有名。

・京友禅

京友禅とは友禅染めという染色技法で作られた着物の中でも、京都で生まれたものを指します。「京友禅」は日本三大友禅の1つです。

・加賀友禅

京都の宮崎友禅斎が金沢に伝えたといわれています。そして加賀にもともとあった「加賀染」という模様ぞめを改良し、「加賀友禅」の基礎ができました。がらは、草や花の模様が中心で、京都の友禅よりもたくさんの色を使っています。

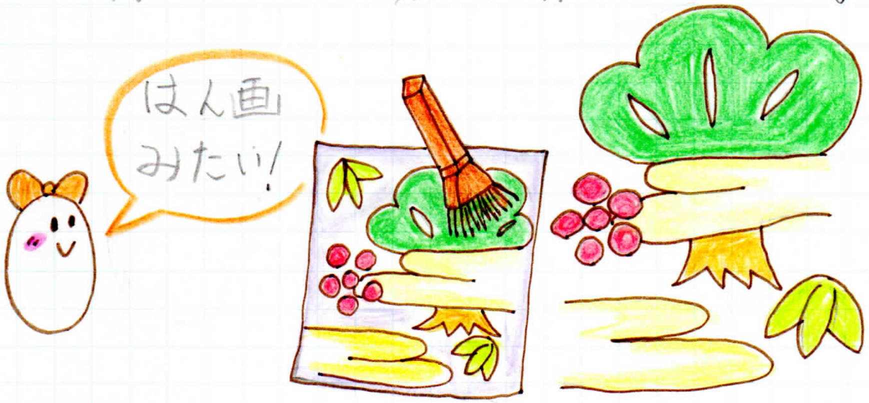
・東京友禅

東京友禅とは江戸友禅とも呼ばれ、江戸で生まれた友禅染めのことです。当時の江戸の町人文化が色濃く反映されており、渋く落ちついた色合いが特徴と言えます。

3.型染めとは

型染め

模様を切り抜いた「型紙」を生地にあてて、染料をのせ、模様をつける染め方。同じ模様をたくさんつくることができます。小さな紋様(もんよう)を全体に繰り返す「小紋」と、版画のように色ごとに型紙を変える「型友禅」があります。江戸小紋、京小紋、紅型など。



染一会 HPより

・江戸小紋

江戸小紋とは、「小紋染め」という全体的に柄染をした着物の種類で、なおかつ非常に細かい柄行で型染めをしたものを指します。「柄染め」とは言いますが、一見すると「無地」に見えるほど柄が細かいのが江戸小紋の特徴。間近で見てはじめて「柄がある！」ということがわかるのです。

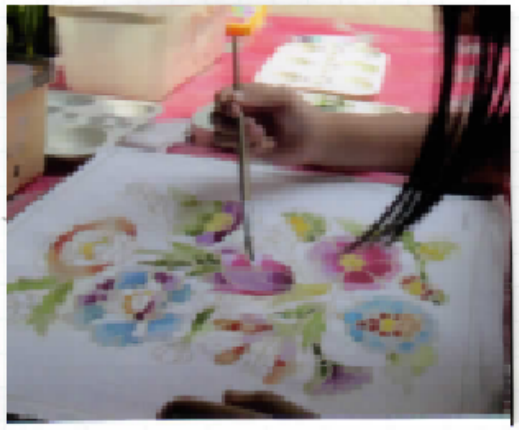
【一般的な小紋】
・柄物であることがすぐにわかる。
・色は数回使われることが多い。

【江戸小紋】
・「色無地」に近くみえる。
・色使いは基本的に単色

4.ろうけつ染めとは

ろうけつ染とは

蝋を使った染めの方法です。蝋をしみこませた部分が白く染め残る性質を利用します。溶かした蝋で布地に模様を描き、染色後に蝋を取り除きます。防染のため蝋がひび割れたところに染料が入ることで独特の染め上がりになります。



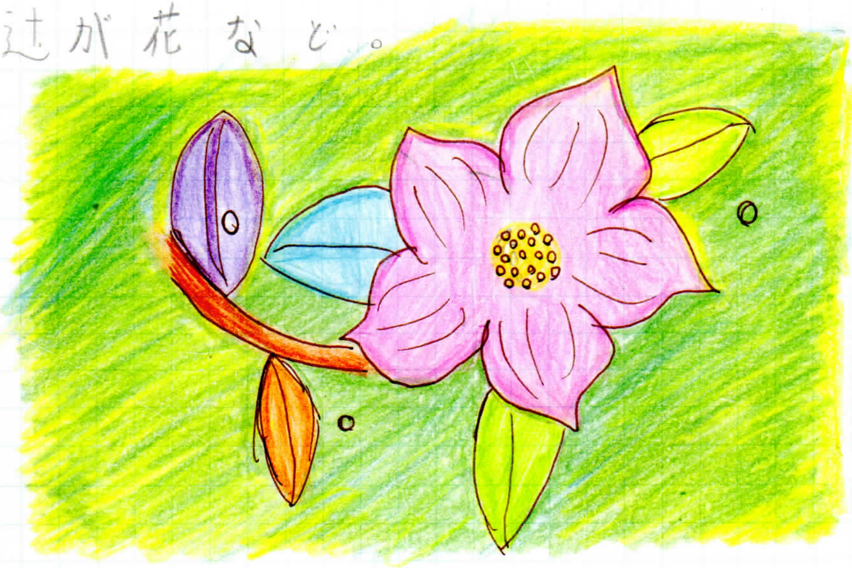
2018年さつえい

ぬり絵みたいにぬるのが楽しかった。グラデーションがむずかしい。

5.紋り染めとは

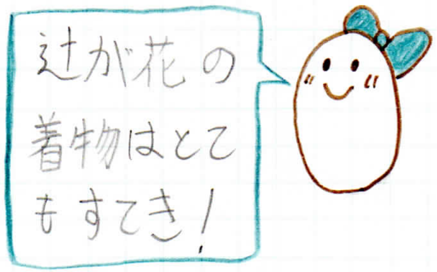
紋り

染めの技法の一種。白い生地を糸でしぼってから染めると、糸を結んだところは染まらず、模様として白く残り、ちぢんで独特の手ざわりになります。京鹿の子紋り、有松・鳴海紋り、辻が花など。



辻が花

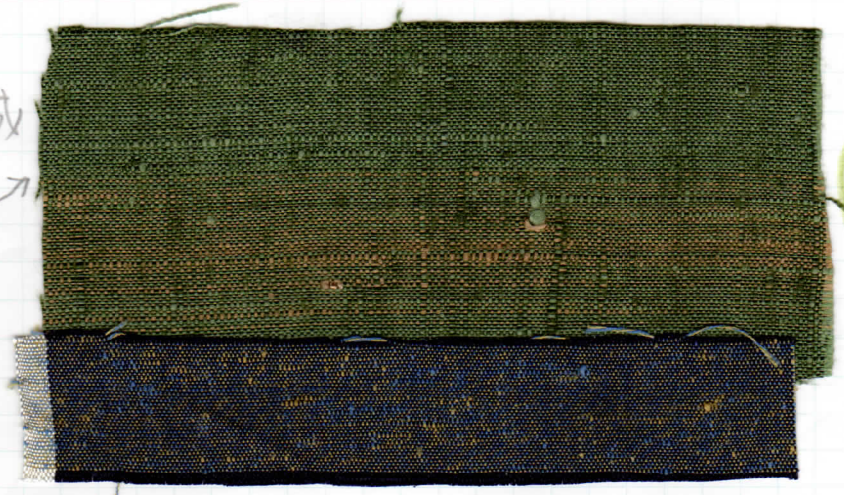
紋り染の技法の全盛期は室町時代で この時期に染の技術も種類も格段に進歩しました。辻が花が生まれたのもこの頃で、室町末期から桃山時代にかけて大流行し、桃山時代をすぎると姿を消したことから「まぼろしの辻が花」といわれています。縫い取り紋りという模様の輪郭を細かく縫うことによって絵画的な模様を紋り染で表現したものを「辻が花染」といいます。



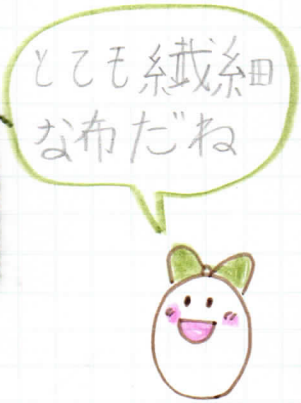
6.紬とは

紬

紬とは、紬糸などを使った先染めの織物のことを指します。紬は、蚕の繭から糸を引き出し絹糸が布表面の生地になっており、絹独特の光沢感が出ることが特徴です。先染めとは、糸の状態で染めてから織りで柄を表現する手法で、あらかじめ染めた糸を手機や機械を使って織られている、非常に繊細な技術を要する手法です。白生地から様々な技法を駆使して模様が染められる後染めに比べ、先染めは模様が糸に染まるまで長い時間がかかることが特徴です。そのため紬を一つ織るのにも、大変なコストと時間がかかるのです。

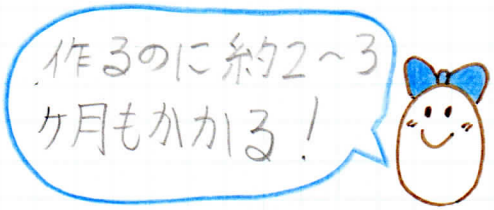


結城紬→



結城紬を織るようす

7.絣（かすり）とは



とても丈夫な織物・絣

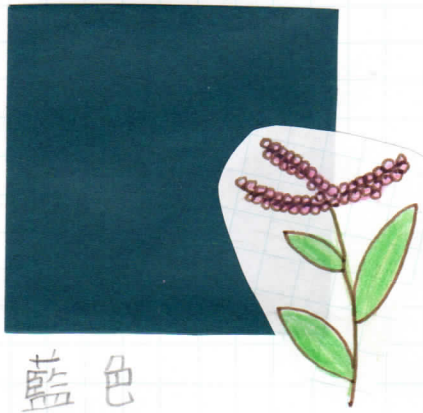
絣は、織物にする前に、出来上がりの柄を計算して染色した「絣色」と呼ばれる糸が用いられたものです。柄がかすれたようにみえることからそう呼ばれるようになりました。完成図案を想定し、柄を織りだすために糸を括り、染めて、織る。完成するまでの工程（こうてい）は30もあり、大人の和服1着分、つまり一反作るには約2～3ケ月かかるそうです。

絣の歴史

絣の発祥地はインドとされます。インドとされます。インドから東南アジアを経て琉球（りゅうきゅう）王国に伝えられたのが14世紀～15世紀。さらに琉球で発展したものが日本各地の絣の発展に影響したようです。ちなみに絣のことを中国では「飛白（ひはく）」、フランスでは「Chiné（シネ」といいます。

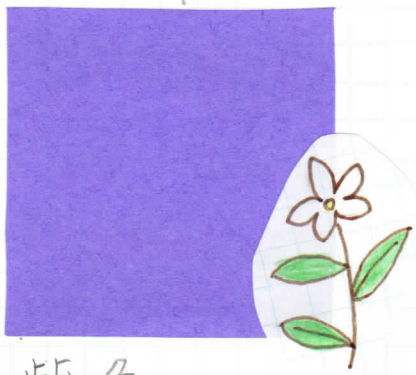
8.日本の美しい色

昔の人々は、「たで藍」や「茜」、「刈安」といった、地味で目だたない草花から、美しい色をとりだす技を生みだし布や紙をはなやかに染めていました。



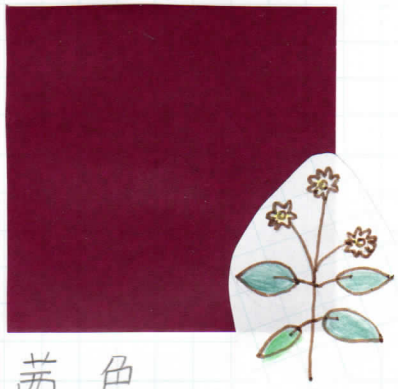
藍色

たで藍の葉で染められた色。日本を代表する色です。



紫色

紫草の根で染めた色。昔は高貴な人々しかみにつけられませんでした。



茜色

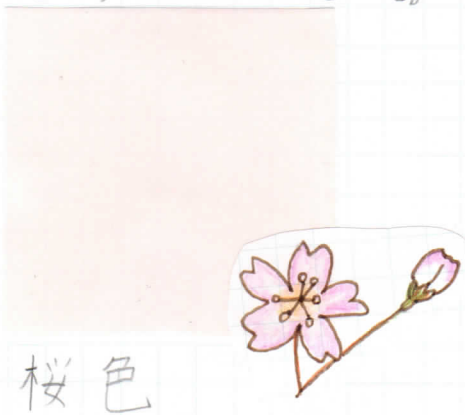
茜の根で染めた色。茜は止血剤としても使われます。

柿渋色

渋柿の絞り汁を発酵させてつくった液を、紙や布にぬったときの色。

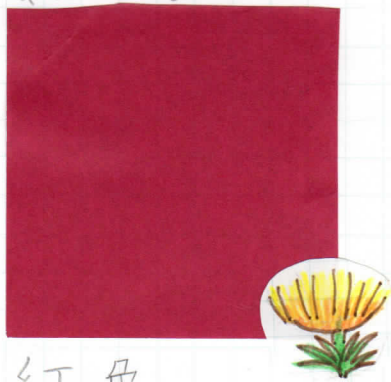
刈安色

刈安という芒(すすき)に似た植物で染めた色。



桜色

桜の花の淡い色。



紅色

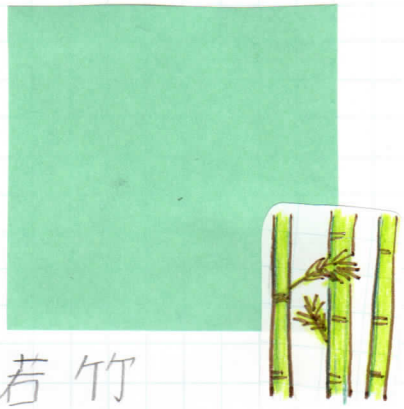
紅花の花びらで染めた色。

鬱金(うこん)色

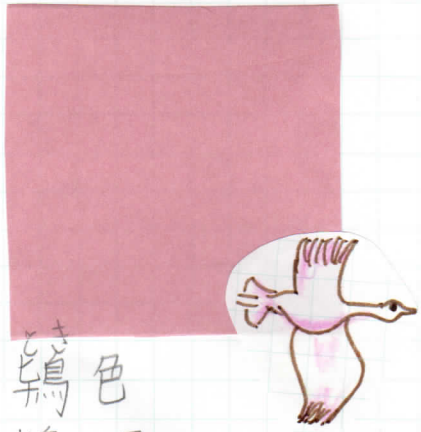
鬱金の根で染めた色。鬱金で染めた布は貴重品などをつつむのにも使われます。

山吹色
山吹の花のあざやかな色。

桃色
桃の花の色。

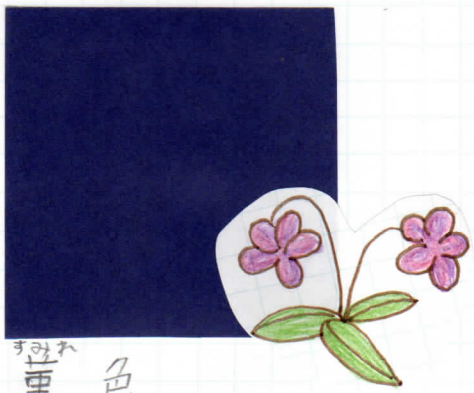


若竹
若い竹のみずみずしい色。

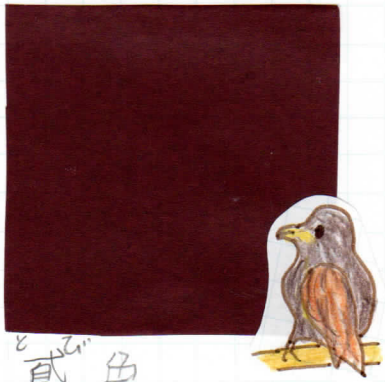


鴇色
鴇の尾羽とつばさの色。

藤色
藤の花房の淡い色。



菫色
紫草の根でくり返しそめた色。



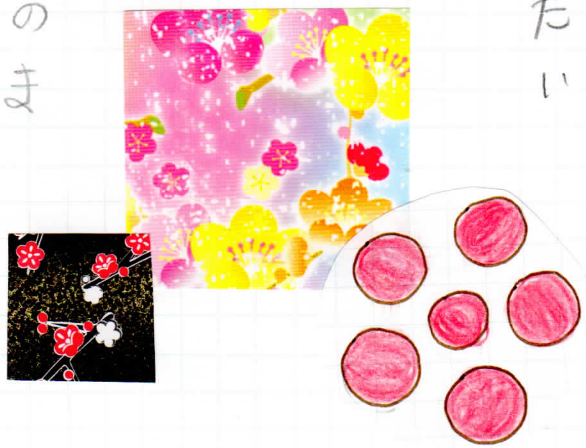
鳶色
鳶の羽の色。

橙色
橙の実の色。

第三章　日本の文様

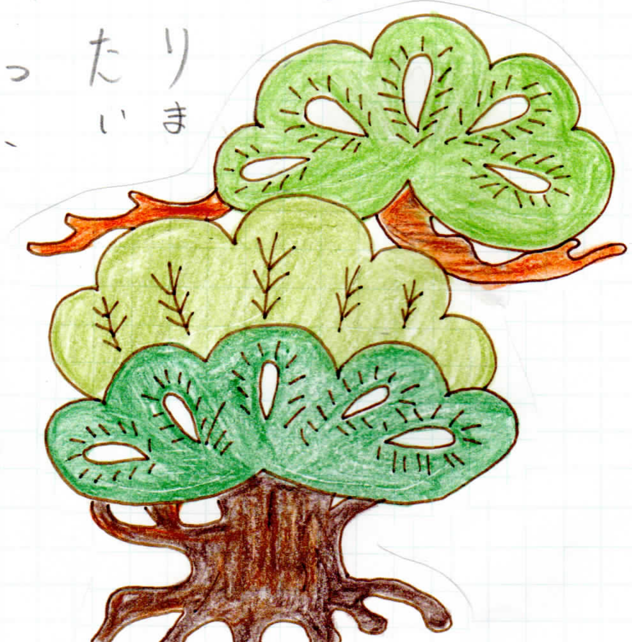
梅

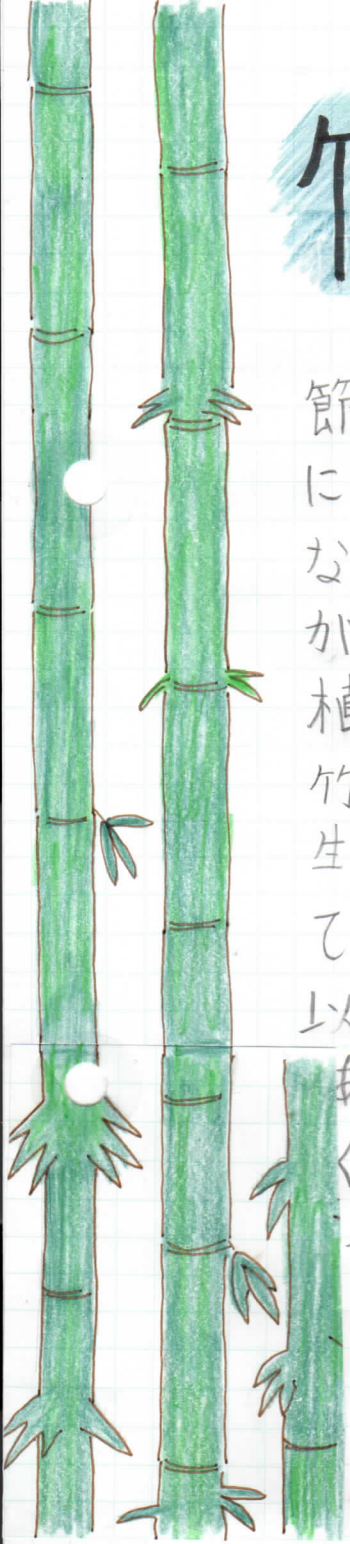
梅は中国原産の植物で、日本には奈良時代の少し前に伝わったといわれています。早春の、まだ寒さが厳しいころに、ほかの花に先がけてつぼみをつけ、花を咲かせるすがたと香りが、気高く美しいものとして愛され、貴族たちが好んで庭に植え、和歌の題材としてきました。



松

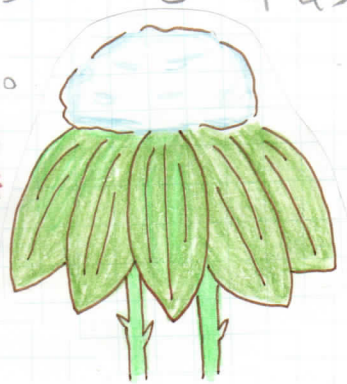
松の多くは、四季を通じて緑の葉をつける常緑樹です。そのことから、中国では長寿の象徴とされ、また伝説のなかに登場する神木ともされてきました。日本でも昔からめでたいものとされ、正月に門松を立てたり、松を飾ったりする風習は、いまだに残っています。



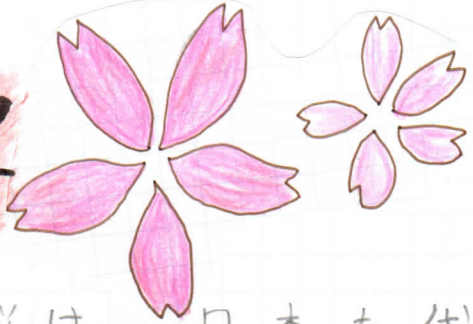


竹

竹はまっすぐにのび、節のあいだはなかが空洞になっています。古くは、なかが空洞の木には神様が宿るといわれ、神聖な植物とされてきました。竹取物語は、竹から姫が生まれ、やがて天に帰っていくお話ですが、日本以外にも似たような話があり、竹には神が降りてくるというイメージがあったようです。



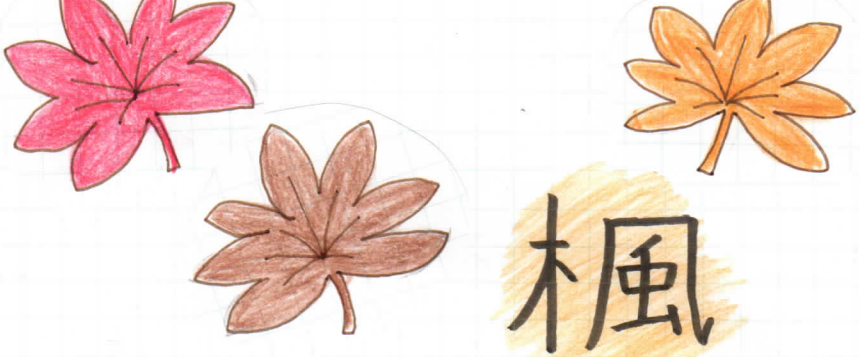
桜



桜は、日本を代表する花であり、昔から、日本にはたくさんの種類の桜が咲いていました。花といえば梅だった飛鳥・奈良時代から平安時代に入ると貴族たちの好みは桜へと移っていきました。さらに、武士が政治の実権をにぎる時代になってからは、開花する時の華やかさ、散るときのはかなさが、武士の理想の生き方にたとえられ、「花は桜木、人は武士」などという言葉も生まれました。

菊

菊は中国原産の植物で、日本には奈良時代から平安時代のはじめに伝わったとされています。中国では菊をひたした水は長生きの薬といわれ、日本でも平安時代、重陽の節句(九月九日)に菊の酒を飲み、菊の花を鑑賞する宮廷行事がおこなわれていました。



楓

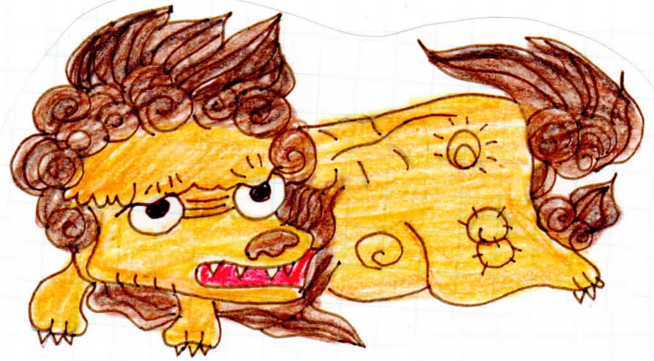
楓は古くから日本に自生する木で、葉の形がカエルの手に似ていることから、カエルテから転じて名づけられたといわれています。

蝶

蝶は大昔から日本に生息していたと考えられていますが、奈良時代になると「蝶が魂を極楽に導く」という思想が、中国から入ってきました。もようとしては、古くは正倉院の宝物などにえがかれていますが、花や鳥などにまぎれるようなかたちです。平安時代のなかばから貴族の衣装にとりいれられるようになり、ようやく独立したもようとして蝶が登場してきます。

獅子

獅子はライオンがモデルになっています。古代ペルシアでは、ライオンは聖なる動物とされ、体の表面に太陽をあらわされていました。このすがたが中国へと伝わり、魔除けの動物としてもように用いられるようになりました。

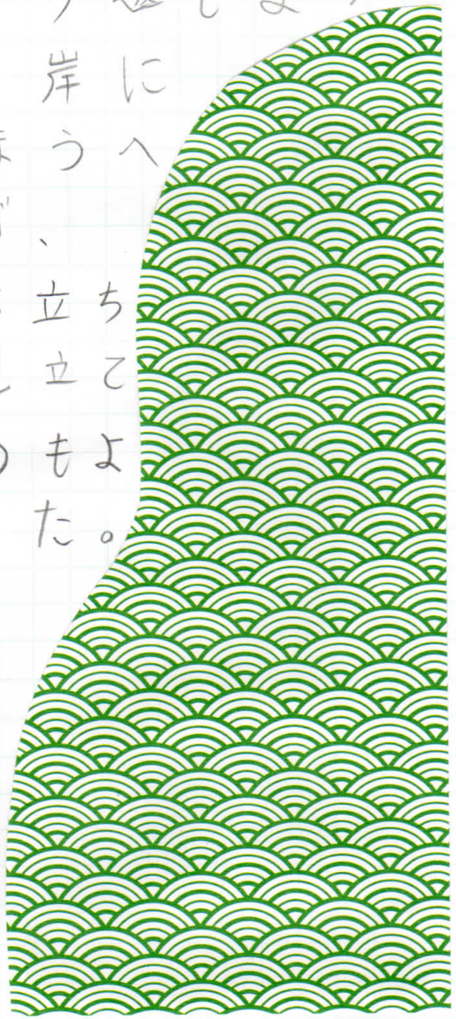


霞

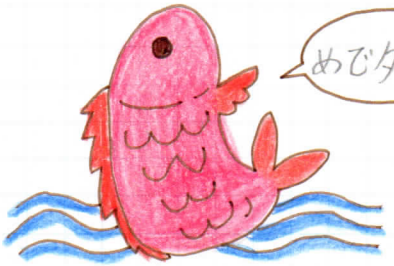
霞は、湿気をふくんだ空気が冷たい地面などで冷やされ、水蒸気が水滴になって空中にただよい、空がぼんやりとして遠方がはっきりと見えなくなる現象です。
遠近感を表現したり時間の移り変わりをあらわす手法として霞のもようが用いられました。

波

波は、潮風に吹かれて大きくうねったり海岸に打ち寄せたりして、さまざまに変化しながら、その動きを絶えずくり返します。
戦国時代になると、岸に打ち寄せては沖のほうへかえす波のようすが、敵陣に攻めこんでは立ち退く戦のようすに見立てられ、旗印や武具のもようとして好まれました。



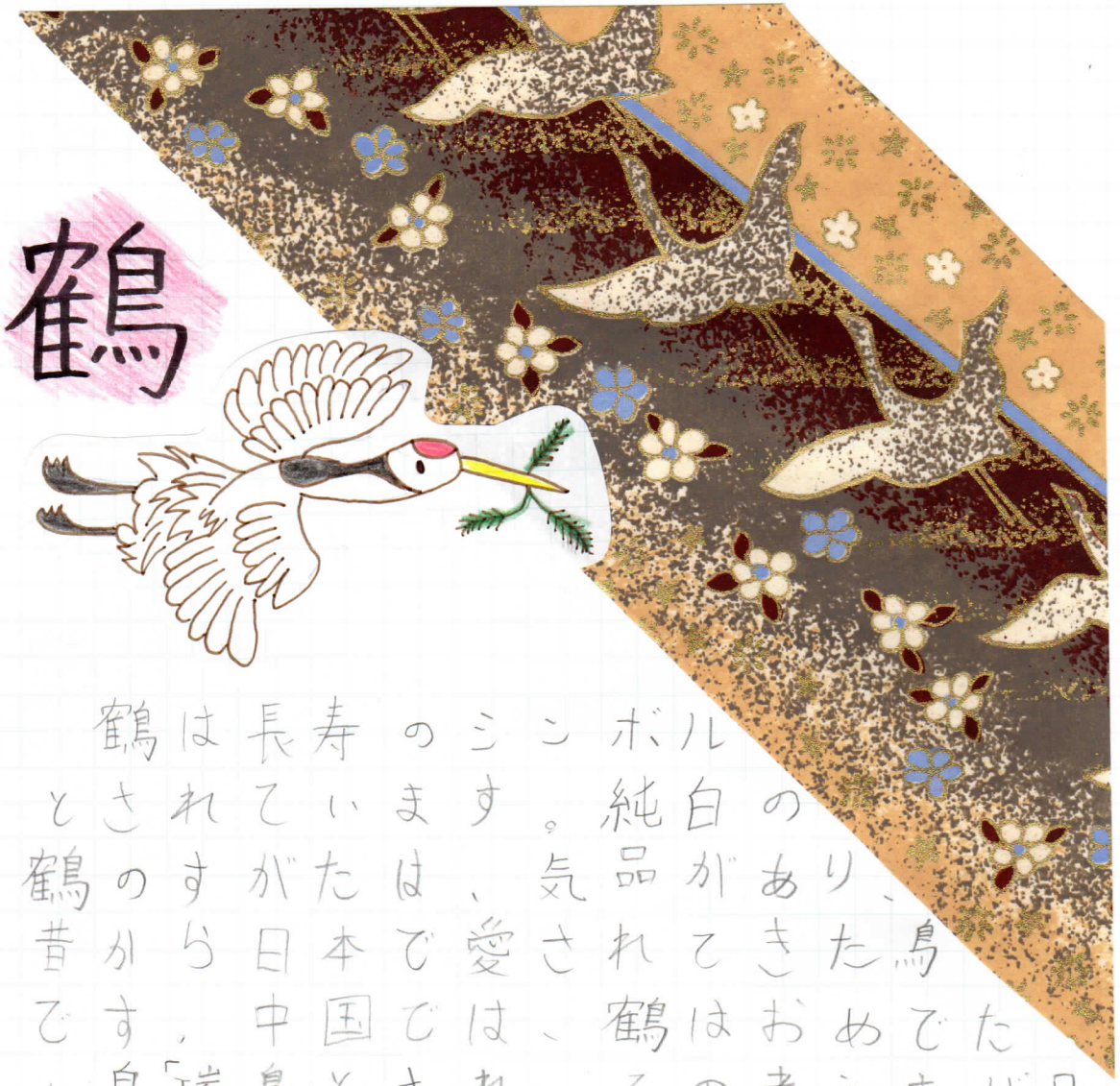
魚



生き物はがい出本
孫を子て鯉とい
の卵られもこと
かさでるな
昔も中きに
たくら、徴そのり龍
はとの象はら
魚こ栄しの鯉か
繁ま「竜でう世魚
む門き伝

出象さきた
でものとて
世徴れまし
た。

鶴



鶴は長寿のシンボル
とされています。純白の
鶴のすがたは、気品があり、
昔から日本で愛されてきた鳥
です。中国では、鶴はおめでた
い鳥「瑞鳥」とされ、その考え方が日
本にも伝わり、平安時代から工芸
品のもようとして好まれました。

車

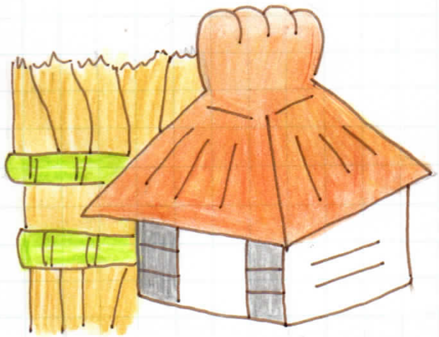
平安時代の貴族たちは、牛が引く「御所車」という乗り物に乗って移動していました。かたちや装飾が美しい御所車は、平安時代後期からおもに着物のもように取り入れられ、現代でも婚礼衣装などに華やかな御所車のもようを見ることができます。

扇

扇は、中国から伝わったうちわが、奈良時代に日本で折りたたみできる形に変化した、日本発祥の道具。扇は、開いた形が末のほうに行くにしたがって広がっていく形状のため、「末広がり」で縁起のよい題材とされ、幅広く使われました。

家屋

家は人の生活になくてはならないもので、古代から、人のくらしは家とともにありました。もようとしては、古くは弥生時代の青銅器にえがかれ、また四世紀の古墳から発見された鏡には、四種類の家屋がかかれています。



矢

大昔、狩猟をしながら食料を得ていた時代から、矢は人間にとって欠かせない道具でした。食料を得る以外にも戦いに使う武具として、矢は人の歴史とともに使われてきました。また、矢は昔から魔をはらう道具とされ、現在でも破魔矢（はまや）として厄よけに使われるなど、縁起のよいものともされています。

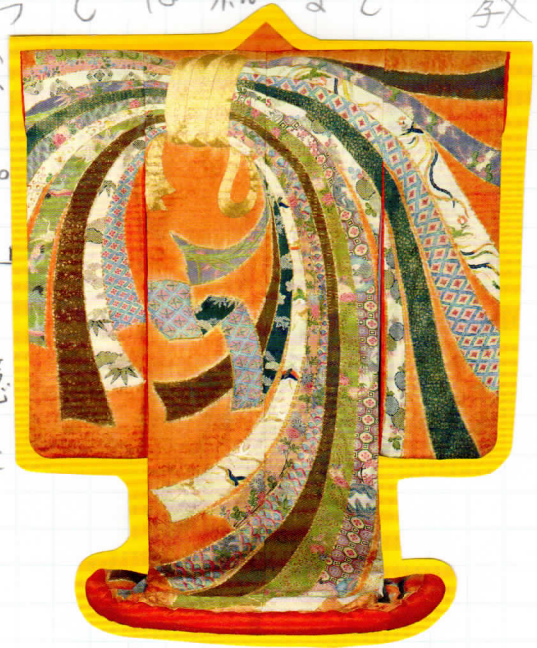
破魔矢→

のし

のしとは、もともとはアワビをうすくそいで乾燥させた「のしアワビ」のことをいい、お祝いの贈り物などにそえられるものです。今では紙などでつくられ、祝儀袋などにつけられています。「うすくのばす」には「うすくのばす」という意味があり、縁起物と「寿命をのばす」という意味合いで、縁起物とされています。

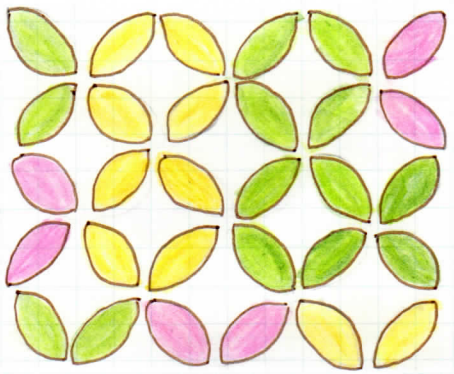
七宝

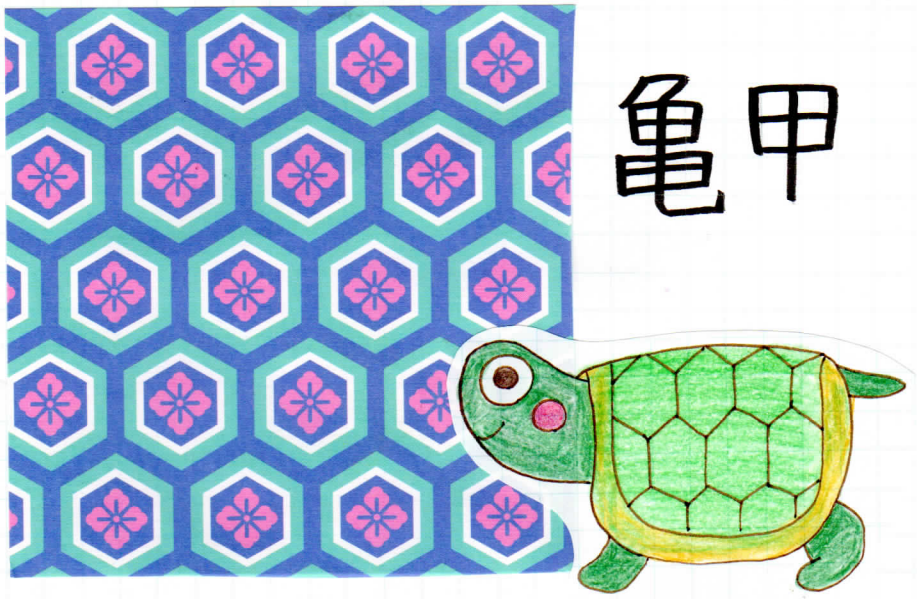
七宝は、同じ大きさの円を、円周の4分の1ずつにうねてつなげていくもようです。四方に広がるということから、「四方」が転じて「七宝」になったといわれています。七宝とは、もともと仏教の経典にある用語で、金・銀・瑠璃・玻璃・めのう・しゃこ・珊瑚の七つの宝物のことをさしますが、もようの名前とかの関係性はっきりわっていません。



紅紋縮緬地婦斗模様

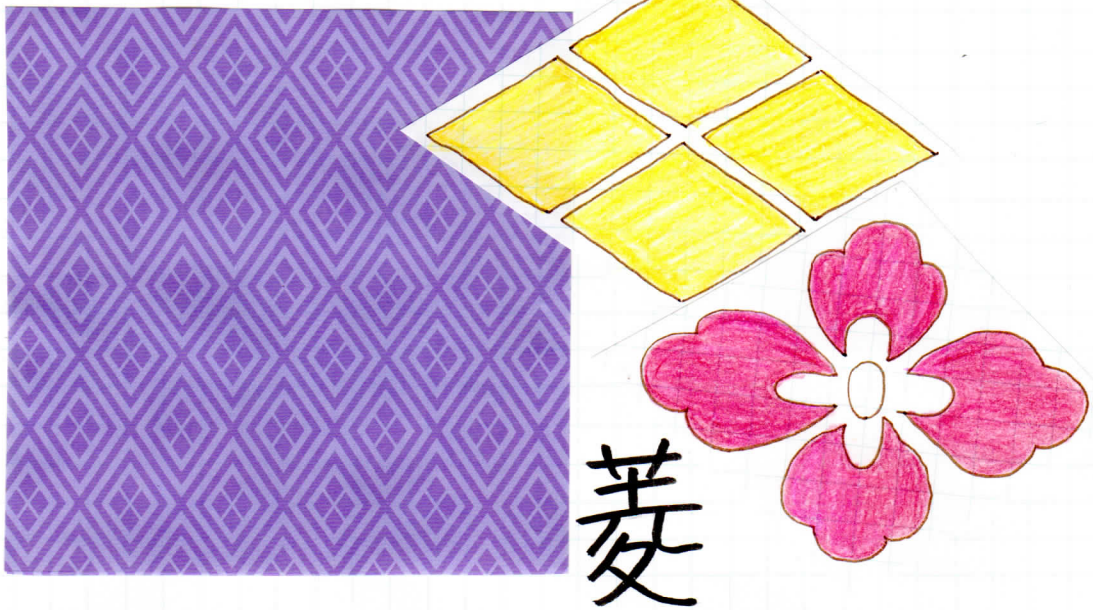
「きもの展」より





亀甲

亀甲は、「亀のこうら」という意味です。正六角形の形が亀のこうらに似ていることから、この名前がつきました。亀は長寿をあらわすことから、亀甲も吉祥もようとして愛用されています。



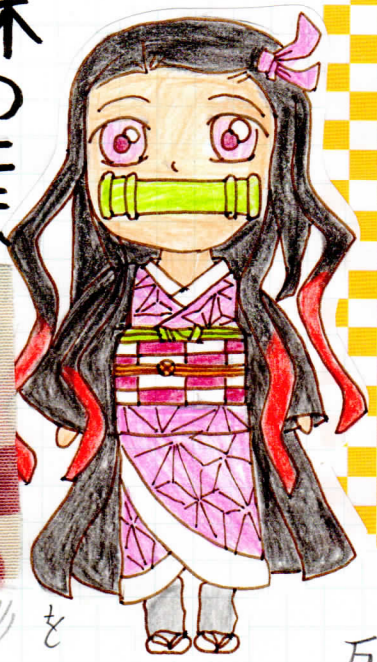
菱

菱とは、ひし形のことをいいます。名前の由来は、池や沼に生息するヒシという水草の葉の形に似ていることから来ているといわれています。古くは縄文時代の土器に見られるもようですが平安時代になると、有職もようとして、貴族の衣装に好んで取り入れられるようになりました。

石畳(市松)

石畳は、色ちがいの正方形を交互にしきつめたもようです。敷石から江戸時代に名称が佐野川市松という歌舞伎役者が舞台衣装に用いたもようです。大阪「市松」とも呼ばれるようになりました。江戸から京、全国へ広まり、それ以降、歌舞伎の舞台判になりました。

麻の葉



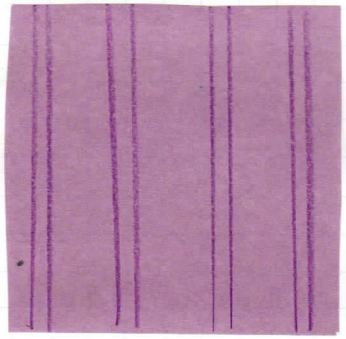
麻の葉は、六角形をでれはのに名麻意長い葉」とよばれるようになりました。麻の成長がこの形に魔よけの力を持っていることから、麻の葉もよい形であるといわれるようになりました。

麻本す。よ世とてけ葉やるす意基す。近こ似づの味すま

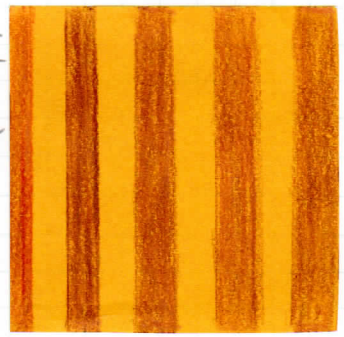
縞

縞は、平行する直線で構成されるもようです。線の太さや配色のちがいによって、さまざまな種類が見られる縞もようですが、古い時代には横縞が「筋」とよばれて絵画や着物のもようにときどき使われていたくらいで、「縞」というよび方はしませんでした。江戸時代後期になると、国産の縞織物がつくられるようになり、単純明快な柄が「いき」であるとされ、町人のあいだで大流行しました。

「三筋立」の衣装を身につけている歌舞伎役者



太い縞の横に細い縞をそえた「子持縞」。



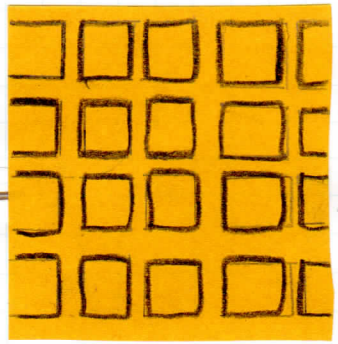
波線で縞もようをあらわした「よろけ縞」。

2本1組の筋を、一定の間隔に置いた「金通し」。

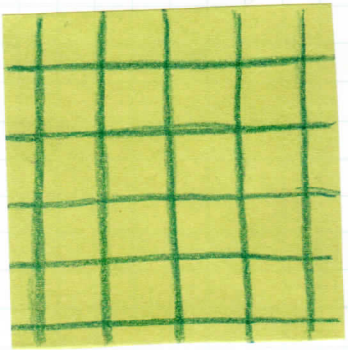
太い縞をならべた「棒縞」。「ごぼう縞」ともいう。

格子

縦と横の直線でつくられるのが格子もようです。細い木を縦横に組んでつくる格子戸に似ていることから、「格子」とよばれるようになりました。「格子縞」ともいいます。平安時代から鎌倉時代ごろの絵巻物にはすでに格子の表現が見られ、子どもや女性の衣装などに格子もようが使われていました。



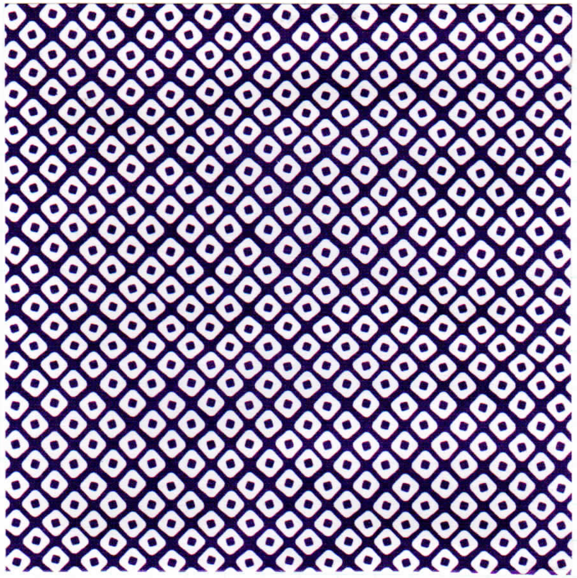
「障子格子」の格子は、障子の骨のように枠に囲まれた四角形のようなかたちをしている。



碁盤の目のように縦と横の幅が同じ「碁盤格子」。

歌川国芳「縞揃女弁慶松の鮨」

歌舞伎「勧進帳」の衣装



点

点のもようを布に染める方法には、いくつかの手法があります。「絞り」という技法は、布の一部を糸でしばるなどして染料がしみこまないようにし、もようを染めだすもので、奈良時代から続く伝統的なものでした。この技法を使ってあらわしたのが「鹿子」というもようです。たいへん手間がかかる技法であったため、布一面を鹿子のもように染めた「総鹿子」は、高価な品とされました。

江戸小紋　「ぜいたく禁止」に対抗

ひかえめな図柄が特徴の「江戸小紋」が広がったのは、徳川幕府が武士や庶民に対してぜいたくを禁じる「しゃ侈禁止令」をたびたび出したためでした。派手な図柄は禁止でも、小さな模様であれば、遠目には一見、無地のように見えます。「これなら、お上も問題あるめえよ。」まさに「粋な江戸っ子」の心意気が模様になったと言えるでしょう。

第四章 日本の装束の歴史

上古時代

主なできごと

- 縄文土器が作られはじめる
- 邪馬台国の卑弥呼が中国に使いを送る。

ころも
衣

おび
帯

も
裳

腰から下、下半身を一周して覆う布で、衣と裳で正式な衣装とされます。

つぶしまだ
潰し島田

島田まげを大きくしたような髪形に、櫛をさす。

みづら
美豆良

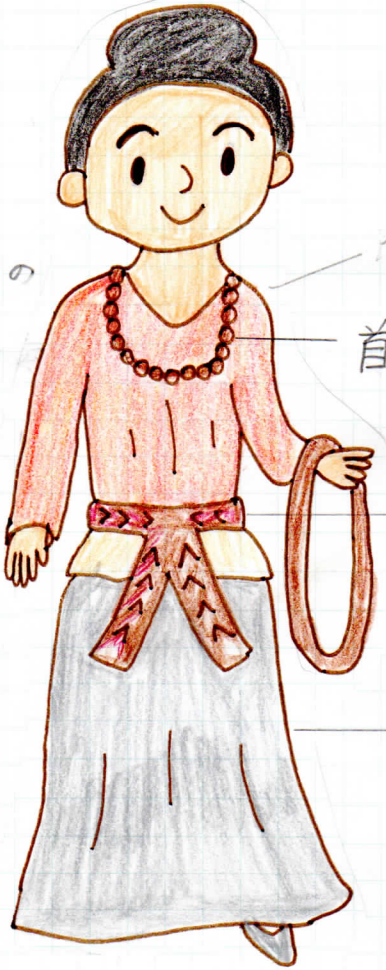
身分の高い人は耳の下、低い人物は耳の横で髪を結ぶ。

帯

はかま
褌

あゆ
足結い

足の動きを助けるためのもの。



衣

首かざり

帯

裳

飛鳥時代

主なでき事

・冠位十二階が制定される。
・十七条憲法が制定される。

高松塚古墳の壁画には、7世紀から8世紀の初めごろの唐風の男女の風俗が描かれている。

東帯及び衣冠着用の時の表着。

天武朝の服制にある、ぎ式の時に用いられる長い腰紐。

女は裳という竪縞のスカートと色とりどりの衣(きぬ)とよばれる上着を着用している。

男は上衣と白い袴をはいた朝服姿をしている。

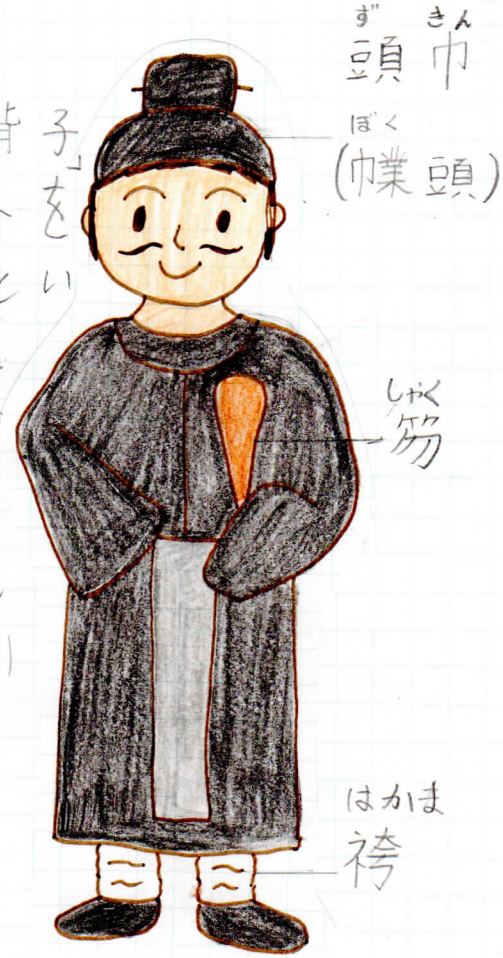
奈良時代

主なでき事

・三世一身法が出される
・光明子が皇后になる

中国の影響を強く受けた時代。衣服も中国風で、カラフルです。

衣の上に「背子」というベストを着て、「裳」というスカートをはき、肩から「領巾」という長いショールをかける。



「朝服」は、入陸文化の影響を受けた衣装で、有位者が朝廷に出仕する時に着用した。

平安時代

主なできごと
・平安京に都をうつす。

唐風文化の流入により、大きな変化を遂げた上流階級の服装。庶民の服装の変化は非常にゆったりとしたものだった。

十二単は、12枚ではなく、8枚の構造だったそうです。

笏
笏とは、中国において束帯の着用のさい、右手に持つ細長い板。

笄
男女ともに髪をかきあげるのに用いた細長い具。

宝冠
宝石、金属等で飾られた冠。

表袴

うわぎ
表着
一般に着る衣

からぎぬ
唐衣
短い半身の衣

張袴

女の人は上半身に唐衣、表衣、袿、単、肌小袖を来る。

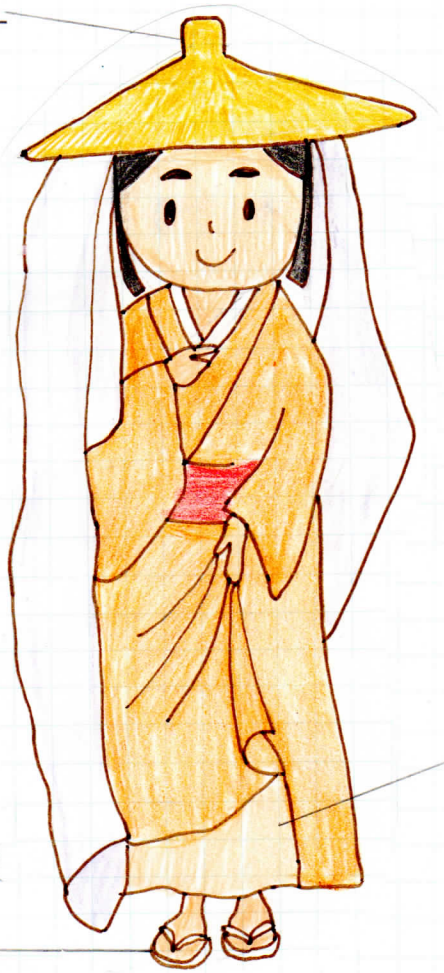
鎌倉時代

主なできごと

・義経が平泉で自害
・鎌倉幕府がほろびる。

市女笠（いちめがさ）の巾子（こじ）

本来は市中の庶民の女の人が用いたが、やがて上流の女の人も旅の時などに用いた。



むしのたれ衣

単

緒太の草履

緒の太い藺で編んだ草履

立烏帽子

もともとは烏帽子といったがいろいろな折烏帽子が出て来たので、折らないものを立烏帽子といって、折烏帽子と区別した。

蝙蝠（かわほり）

「かわほりおうぎ」の略。開いた形が蝙蝠（こうもり）の羽をひろげた形に似るからいう。

室町時代

主なでき事

・日明貿易始まる・南北朝が統一される。

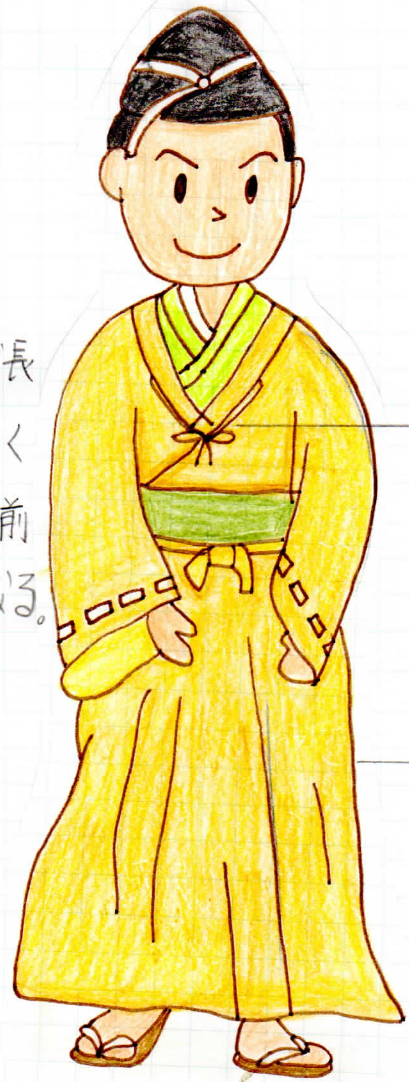
徐々に庶民の生活が豊かになり始めた鎌倉時代。そして室町時代に入り小袖中心の文化の下地が作られていく。

小袖

小袖の袖や裾丈(すそたけ)が長くなり、身幅も大きくなる。小袖の模様も前時代よりも派手になる。

帯

武士が社会の中心になっていくなかで、正装も簡略化されていきます。



烏帽子(えぼし)

前時代から引き続いての服装。

胸紐(むねひも)

大紋(だいもん)の袴

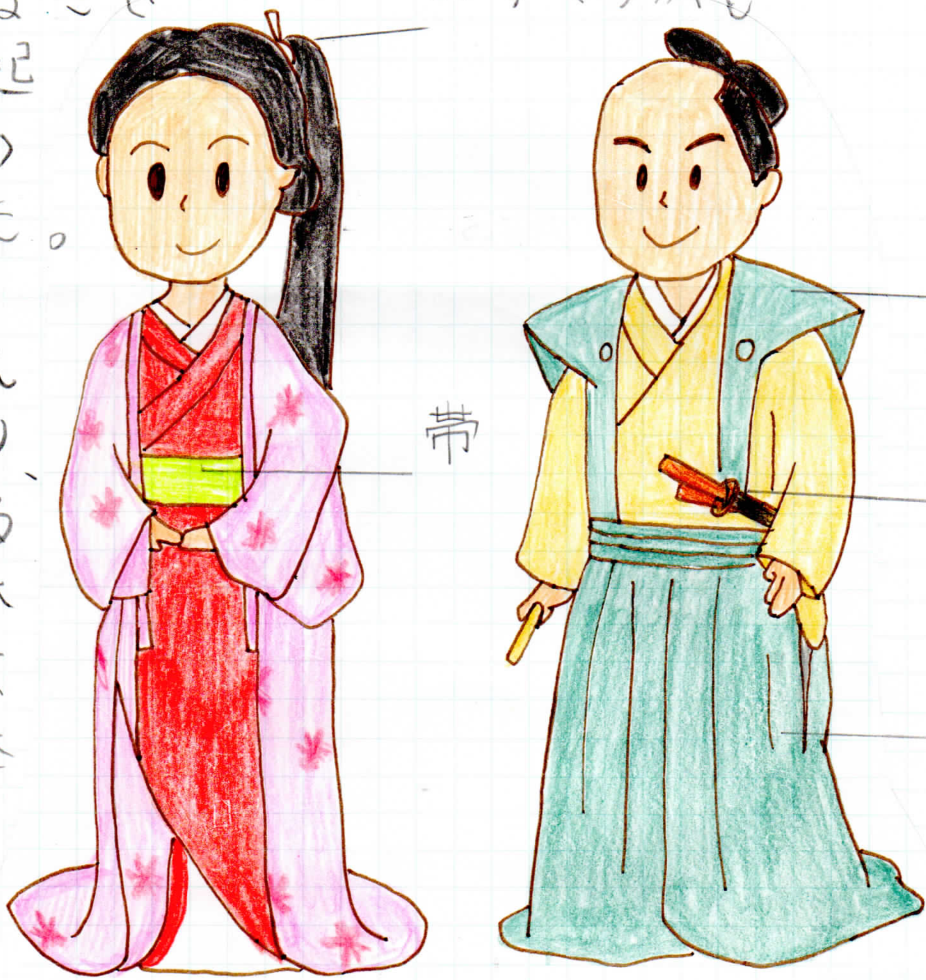
江戸時代

幕府の政治改革が行われた。また、自然災害や大きなききんがたびたび起こり、人びとの生活を苦しめた。

帯の幅がだんだんと太くなり、バランスをとるために髪型も大きく結われるようになり、日本髪も発展する。

主なでき事

- 由井正雪の乱が起こる。
- 目安箱を設置する。
- 本居宣長の「古事記伝」が完成する。



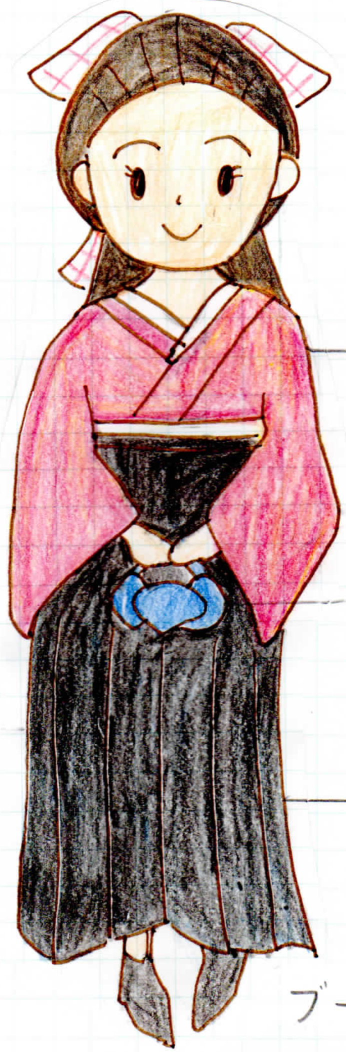
安土桃山時代の略装だった肩衣と袴のセットが、裃として武士の正装となる。

明治・大正時代

外国との交流がほとんどなかった江戸時代が終わり、明治時代になると、さまざまな外国の技術や文化が入ってきました。これまでの日本にない色や柄、化学的な染料や織り機の輸入により、着物は大きく発展します。

主なでき事

- 大逆事件が起こる
- 日本銀行が開業する



「大正デモクラシー」の風潮が広まり、政党政治が確立。一九三〇年代に入ると軍部が台頭して中国侵略が始まる。

「着物」は本来、日本語で衣服という意味ですが、近年では「日本の伝統的な衣服」という意味で使われています。現在着られているような形の着物が生まれたのは平安時代にな。てからのことと言われています。

平安時代に入ると、着る人の体の線にとらわれず、布地を直線に裁(た)ち、縫(ぬ)い合わせる「直線裁(だろ)」という方法で着物が作られるようになりました。

直線裁ちの着物は簡単にたため、まだ寒い時には重ね着ができ、暑い夏には麻などの涼しい素材を使う、というようにいろいろな工夫が取り入れられて、多くの種類の着物が作られてきました。こうして着物は日本人の生活の中に根をおろしていきます。

そして同じ型の着物を重ねて着るという方法が定着するにつれて、色の組み合わせを重んじる、色彩りの感性も発達していきました。色の組み合わせも、政治的階級や、季節の色を先取りした色調などが強調され、日本独特の色と調和を尊ぶ伝統がそこにうまれました。

鎌倉時代や室町時代になると、女性に限らず男性もまた華やかな色の着物を身につけるようになりました。武士の勢力が広がっていくにつれて、戦地に着ていく衣装はそれぞれの大将の個性を主張したもので、さながらファッションショーのようにあでやかであったと言います。

江戸時代は安定した徳川家の武家政権の下、全国各地の大名が領地を与えられ、自治を任せられる藩制度が敷かれました。藩の制服とも言える裃は、麻の生地を糊で固めて、肩の部分をはり出させた上着と袴の総称で、藩ごとに模様が決ま

っていました。これらの「武士の制服」の発達で、着物全体の技術が飛躍的にのび、着物そのものが美術工芸としての価値を高めていくようになりました。そのため家の財産として着物を親から子に伝えていく風習が根付いていきました。

明治時代になると、日本は外国の文化の影響を強く受けるようになりました。着物を着る場合はそれぞれの家系を示すシンボルである家紋を入れた「紋付」が礼装と定められました。それ以来着物での礼装は男女共に紋付となりました。

現在では、日常生活の中で着物を着ることは少なくなり、一般的に着物は晴着という意識になり、結婚式などのあらたまったセレモニー、おそう式、お茶やお花の席で、または夏のお祭りやヒタなどの機会に、着物を身につける習かんがあります。

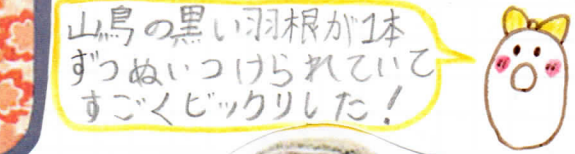
第五章　着物のうつりかわり

きもの展　HP、文化遺産オンラインHP　より

縫箔　白練緯地四季草花四替模様

まっすぐ裁断された布を縫い合わせてできている着物。男性の物も女性の物も基本的な形はほとんど同じです。もともとは下着として着られていた「小袖」が室町時代後期から表着となりました。

織田家の家紋である揚羽蝶の模様を、羽毛を埋め込んで表した陣羽織。



陣羽織　黒鳥毛揚羽蝶模様

能装束〈雪持柳地紙散繍箔肩裾／〉

前身頃（まえみごろ）の肩裾（かたすそ）と後身頃（あとみごろ）の肩に雪持柳（ゆきもちりゅう）に桐（きり）・八重桜（やえざくら）・紅葉（こうよう）・椿（つばき）・橘（たちばな）を配した地紙を刺繍であらわし、地には金銀の摺箔（すりはく）を施している。

きもの展 HP
文化遺産オンライン HPより

振袖 紅絞縮緬地束熨斗模様
江戸時代・18世紀

身幅が広く、袖幅は狭く振りのない小袖である。豪華な作で初期小袖の優れた品である。

紅絽子地花車模様打掛

紅絽子地にこぼれんばかりの花々を盛った花車模様を絵羽に配した打掛。

こんな細かいししゅうができるから昔の人は手先がきようだったのかな？

小袖 黒縮緬地波鴛鴦模様
江戸時代・17世紀

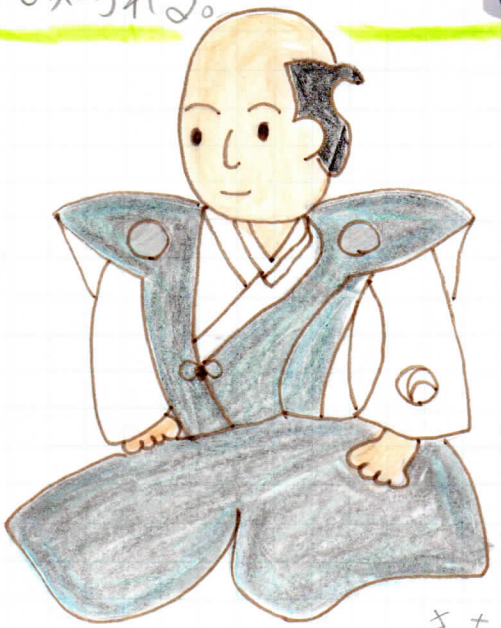
黒縮緬地に染めと刺繍を用いて、波とゆあんやんの文様を躍動感ある流れるように表したかんぶん小袖である。

小袖　白綾地秋草模様　尾形光琳筆
江戸時代・18世紀

尾形光琳は、江戸での寄宿先である深川の材木商（ざいもくしょう）・冬木家に滞在中、冬木家の奥方のために白小袖に秋草図を描きました。彼が直接小袖に描いた作品のうち完全な着物の形でのこされてきた真筆（しんぴつ）は、「冬木小袖」のみです。

尾形光琳

江戸時代、元禄期を代表する京都の画家。陶芸家乾山の兄。俵屋宗達に深く傾倒して、その様式を独自の感覚で再興し、宗達・光琳派を大成した。各方面にすぐれた作品をのこすが、とくに「燕子花図」「紅白梅図」は屏風絵における装飾性と絵画性を深く追求した傑作として知られる。



火事羽織　紺木綿地刺し子人物模様
江戸時代・19世紀

江戸の町方（まちかた）ではとびしょくの人々が組体制（くみたいせい）で火消しの役割を果たした。表は籠目（かごめ）模様を型染にし、木綿地を刺し子にして防火を強化した。鎮火したあかつきにはうら地の派手な描絵模様を見せて市中を歩いた。

きもの展HP、文化遺産オンラインHPより

きもの展 HPより

振袖 白縮緬地衝立梅樹たか模様（しろちりめんじついたてばいじゅ もよう）
江戸時代・18世紀

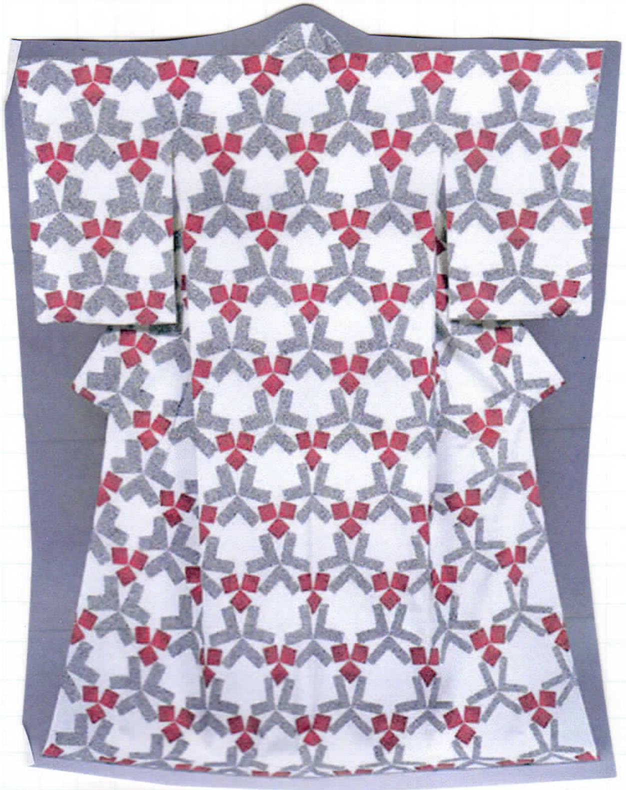
衝立（ついたて）に留まる雄雄しい鷹を絵画のように繊細かつ華やか染めた開放的なデザインの振袖は、若衆が着用したと考えられる。

染め方がいままでとちがう！

振袖 淡紅輪子地宮殿模様（うすべにりんずじきゅうでんもよう）
昭和時代・20世紀

ベルサイユ宮殿にでも迷い込んだような華麗なデザイン。第二次世界大戦後は、失われたきものの文化を取り戻すべく、現代人の好みや流行に合わせて、さまざまなデザインのきものが制作された。

きもの展HPより



友禅訪問着　白地位相割付文「実り」
森口邦彦作　平成25年

三越のショッピングバッグのデザインは、このきものの模様を元にしている。フランスに留学しグラフィック・アートを学んだ森口邦彦は、友禅染の重要無形文化財保持者であった父が生みた技法を用い、着物にこう成した。

TAROきもの　岡本太郎原案
昭和49年頃

岡本太郎は「きものは、柄でおさまってしまうよりも、むしろ「絵画」を身につけて、誇らしく楽しむ、世界でもユニークな衣裳だと思う」と語った。

安土桃山時代は、小袖が表着として着られています。小袖とは、袖口を小さくぬいあつめて小型の袖にしたものです。

江戸時代になると一反の布を同じ比率で無駄なく直線裁ちして着物を作るようになりました。

明治時代になると、外国風な着物、モダン柄の着物が登場しました。着物には、オレンジ色や、水色などが使われました。

おわりに

私はこの夏休み、養蚕のことを調べて、「蚕を育て、繭から糸を取るのは大変なんだな。」と思いました。その時、ふと3年の時に蚕を育てたことが思いうかびました。最初は、学校から家に1ぴき持ち帰ってきました。蚕がくわの葉をちょっとずつ食べている様子がかわいくて、ずっと見ていました。次の日、学校からさらに5ひきの蚕を持ち帰りました。すると、6ぴきの蚕がガツガツくわの葉を食を食べ、たくさんのフンをして、お世話がものすごく大変になりました。この経験から何千びきもの蚕を育てている農家さんは座るひまもないくらい大変なんだろうなと思いました。

家族と行ったシルク博物館には、蚕や絹についてたくさんてん示されていました。なかでもおどろいたのは、繭の糸が人間のかみのもより細いということです。その糸から生糸ができ、織り物になるには、手間と時間がかかることを学びました。そして、「きもの展」では色あざやかな着物をたくさん見ることができました。一番ビックリしたのは、織田信長が着ていた「黒鳥毛揚羽蝶模様」の陣羽織です。山鳥の羽毛を1本ず

つぬいつけて、家もんの揚羽蝶を表していました。「この陣羽織を着た織田信長は、とても強そうに見えたんだろうな。」と思いました。ほかにも細かいししゅうがほどこされた着物や、美しい大正時代の着物も見ました。

私は養蚕のことを調べて、蚕や着物は昔の人びとにとってとても身近なものなんだと思いました。それと同時に、これから先、もしかしたら着物の文化が消えてしまうのではないかと思いました。今はお祝いの時などにしか着る機会がなくなってしまったからです。日本が世界にほこるべき着物文化が、形は変わっても、残っていて欲しいと思いました。

大日本蚕糸会
http://www.silk.or.jp/kaiko/kaiko_fushigi.html (アクセス日 2020. 8.1)
宝絹
http://www.takaraginu.com/study/ (2020. 8.1)
シルク博物館
http://www.silkcenter_kbkk.jp/museum/ (2020. 8. 1)
アトリエトレビ
http://www.akasaka-trevi.jp/aboutsilk/ (2020.8.1)
絹糸総合サイト
http://www.brandnewsilk.com/story/15.htm (2020.8.1)
ダイヤクリーニング
https://diacleaning.com/blog/179-2/ (2020.8.3)
日本服飾史
https://costume.iz2.or.jp/ (2020.8.3)

キッズウェブジャパン

https://web-japan.org/kidsweb/ja/virtual/kimono/kimono01.html (2020.8.3)

京都伝統産業ミュージアム

https://artsandculture.google.com/exhibit/4gkCoL4nVSotIw?hl=ja (2020.8.3)

染一会

https://www.someichie.jp/hpgen/HPB/categories/62925.html (2020.8.3)

シルクと暮らす

https://www.katakura.co.jp/silk/study/museum/column1.h (2020.8.16)

文化遺産オンライン

https://bunkanii.ac.jp/ (2020.8.16)

図解　江戸の暮らし事典
河合　敦　学研　2007年

着物えほん
高野　紀子　あすなろ書房　2009年

着物の大研究
馬場　まみ　PHP　2006年

おひなさまの平安生活えほん
ほりかわ　りまこ　あすなろ書房　2020年

着物の歴史
橋本　澄子　河出書房新社　2005年

絵でみる江戸の町とくらし図鑑
善養寺　スズム　廣済堂　2011年

和の文化をうけつぐ日本の伝統もよう1
小山　弓弦葉　汐文社　2018年

和の文化をうけつぐ日本の伝統もよう2
小山　弓弦葉　汐文社　2018年

和の文化をうけつぐ日本の伝統もよう3
小山　弓弦葉　汐文社　2018年

きもの文様図鑑
長崎　巌　平凡社　2005年

図解　日本の装束
池上　良太　新紀元社　2008年

キモノ文様事典
藤原　久勝　淡交社　2001年

着物の織りと染めがわかる事典
滝沢　静江　日本実業出版社　2007年

きものの文様
藤井　健三　世界文化社　2009年

調べ学習で行った場所

シルク博物館
神奈川県横浜市中区山下町1番地シルクセンター2階

絹の道資料館
東京都八王子市鑓水989-2

東京国立博物館
東京都台東区上野公園13-9

由井市民センターみなみ野図書館

使用した写真のさつえい者
伊藤 れい